

臨床社会学の方法(52)

—男性・男性性の現在を把握する研究の動向—

中村 正

1. 男らしさ、男性・男性性研究と男性の現在

男らしさ、男性・男性性研究が盛んになりつつある。もちろん、女らしさ、女性・女性性研究に比べるとまだまだ少ない。そして何よりも、思潮や思想としてのフェミニズムに対応するようなものはない。マスキュリニズムとはいわない。男性主義のようになるからだが、マジョリティ(多数派)集団は抑圧側なので言葉をつくりにくい。二項対立風にいえば、健常者と障がい者、白人と有色人種、男性と女性、資本家階級と労働者階級、異性者者と同性愛者などの社会的な対立軸があり、前者は集団として支配的な社会的地位となり、社会構造としても特権的なマジョリティという地位を占める。後者はマイノリティとして、受苦的でもあり、社会への批判的なポジションに立つ。構造的な劣位、何らかの脆弱性、差別を被るなどして社会の矛盾を映し出す。健常者中心主義、家父長制やジェンダー秩序、資本主義社会、ヘテロセクシズム(異性愛中心主義)、レイシズム・人種差別主義や民族抑圧などが批判的ポジションから社会構造として把握されていく。

少し前になるが『現代社会学辞典』(弘文堂、2012年)で「男性問題」という項目を

執筆した。次のように書いた。「ジェンダーは性において非対称な関係性があることを指摘し、集団としては支配的な地位にあるジェンダーとして男性をとらえた。人格形成、対人関係やコミュニケーションの仕方、感情規則、行動様式等の総体に男性性ジェンダー作用がみられる。また、男性に期待されるライフスタイルとライフコースが編成され、社会的諸属性(階級・階層、学歴、職業的地位等)や家族的構成(出生順位、家族履歴、親族関係等)と相関して、個人としての男性の有り様が形成されていく。社会的役割として、ライフサイクルにおいて少年、夫、息子、父親という諸相があり、ここに家族関係、性・セクシュアリティが関わり男性の多様な生活が構築される。男性役割は、弱くあることの否定、防衛機制としての虚勢(暴力)、逸脱行動と攻撃性の媒介、感情面での脆弱さ、ケアからの疎外等の動因となりやすく、全体としての人間性形成に困難をきたすように作用する。その結果、男性の生き辛さや行動上の諸問題が派生する。」と。

しばらく前の原稿なのでアップデートしなければと考えている。ジェンダー秩序として記せば記すほど、二項対立的な思考を強化することになるので、それを回避する

ためにポジショナリティという概念が登場し、多様な属性の交差を意識してジェンダー構造を把握するようになってきている様子を追記する必要があるだろう。特に若い研究者たちが取り組む男らしさ、男性・男性性研究はポジショナリティ論からのものが多く、多様な男性の現実を把握するための視座、概念が豊富になりつつある。しかも社会構造との結びつきを視野に収めるような内容が多い。

しかしそうした追記をし、アップデートしたとしても、なお男性・男性性研究として括ることで研究を行うしかない面もあり、ジェンダー研究の半分足りていない領域を開拓していることに変わりはない。だからどうしても二項対立的な思考を強化することになる。

「男らしさ」という言い方は規範的な側面なので、批判的研究の対象として議論しやすいが、男性それ自体の把握は必要で、「男性の現在」として切り出す必要はある。それでもこの立論も難しく、ジェンダーギャップの甚だしい社会として名指しされている日本社会のなかでは、男性の現在や男性性の客観的把握を語る際であっても特殊な見方をされることが多い。たとえば、男性の困難を語ると、それは「男もつらいよ型男性研究」と名付けられ、たとえそれが社会構造的な視野を有した研究や言説であってもある種の渦のなかに巻き込まれていく。

また、「男性の現在」の研究は、加害と被害という二項対立のなかで位置付けられることも多く、男性＝加害者ポジションという固定観念があり、なかなか難儀な立論を迫られる。生理・生殖・身体に関わる男性そ

れ自身の研究、育児、介護、家事などの再生産やケアにかかわる男性の研究、仕事、労働と男性、メンタルヘルスと男性、戦争と男性など、男性と男性性に関連するテーマは多い。こうした男性の生態を学問的に把握することが男性・男性性研究のコンテンツとなる。男性性として当該社会において観念される意識（男らしさ規範）もあり、それが体系化されていき文化となり、実践として習慣的・日常的のなかに定着している面がある。総じて言えば、男性・男性性の文化である。ジェンダー研究の裾野を拡大するためにも、社会意識、文化規範、習慣行動などをささえる人々の観念としての男性・男性性は正確に把握しておくべきだろう。わかりやすく言えば「男性白書」のようなものが必要だろう。次にこの点を強調した研究を検討しておこう。

2. 報告書「アメリカ男性の実態 2023：危機と混乱から希望へ」の紹介

2-1 調査の概要

紹介するのは STATE OF AMERICAN MEN 2023 : FROM CRISIS AND CONFUSION TO HOPE（「アメリカ男性の実態 2023：危機と混乱から希望へ」）である。以下、重要だと思える箇所を部分翻訳しつつ紹介しておく。

この報告書で提示するデータは、2023年に米国男性 2,022 名を対象に実施したオンライン調査に基づく。サンプルは米国人口の多様性に可能な限り近い構成で構築されたという。米国内の 18 歳から 45 歳の男性全員を対象とした。この年齢層を設定したことで、成人期を迎え、キャリアを築き、家族形成を試みる若い世代の男性に焦点を当

て、比較分析を深めることを目的としている。回答者に対しては、年齢、人種・民族、教育レベル、地域、性的指向に基づき、最低割当数と上限制限を適用し、米国実人口構成に可能な限り近似するよう配慮している。

社会生活の質、ストレスと幸福感の経験、オンライン生活、そして彼らがジェンダー平等を受け入れ健全な男性像を志向する程度について、その現状を捉えようとした。

この調査の主要テーマは以下の通り。①男性たちはどう過ごしているか。②彼らは自身の生活や将来、人間関係、恋愛生活、目的意識をどう感じているか。③ストレスや苦痛を処理するため、あるいは指針やインスピレーションを得るためにどこに頼るか。④男らしさについて誰の意見に耳を傾けているのか。彼らは健全な男性像を志向しているか、それともその反対か。⑤デート、ポルノグラフィー、インフルエンサー、社会的つながりに関するオンライン生活はどうか。⑥男女平等を支持するか反対するか。

2-2 調査の背景にある三つの問題意識

この報告書は、「エクイムンド」という団体が発行している。「男性性と社会正義センター」が正式名称である。2011年より活動し、男性と少年をジェンダー平等の同盟者として巻き込み、健全な男性性を促進し、暴力を防止しようとする団体である。「エクイムンド」は世代を超えた有害性のパターンを変革し、少年と男性が生涯を通じてケア、共感、責任感のパターンを育むことで、ジェンダー平等と社会正義の実現に取り組むことを促進させようとしている。

調査は三つの主要な問題意識を背景に取り組まれたという。第一に、#MeToo運動や女性の平等・フェミニズム運動を背景に、

一部の男性(特に若年層)がジェンダー平等への支持を後退させていること。第二に、少年・男性が直面する雇用・健康・目的意識・教育意欲・精神的健康・孤独・人間関係の問題が不安定な状態を生み、反動的な運動の訴求に脆弱化していること。第三に、周縁化されたグループの男性における不安定性は特に深刻であること。

これは米国の男性は危機に瀕しているという問題意識でもある。多くの男性が将来に不安を感じ、自らのアイデンティティが脅かされていると認識している。

この不安は少年期から成人期にかけて常に内在してきたものだ。「男らしくしろ」「真の男たれ」と求められる少年や男性は、強靭さ、自立心、支配性、無感情さといった重なり合う不可能な基準を必然的に満たせず、自らのアイデンティティそのものを否定されているともいえる。

こうした男性的規範は、男性と少年たちの生活のあらゆる側面を支配し、家庭生活、学校、スポーツ、その他のコミュニティ空間に織り込まれている。これらの規範は、思いやりを持ち、感情的につながり、協力的な人間としてのアイデンティティを自信を持って確立する選択肢を若い男性たちから奪っている。多くは完全に孤立感を抱き、達成感の欠如、不完全雇用、ネット依存といった私生活へ退避し、「一人でやっていける」という偽りの姿勢へ逃げ込む。女性嫌悪や白人至上主義に慰めを見出す者もいる。確かに、あまりにも多くの男性が、女性の平等と人種的正義のために必要な行動を無視し、あるいは反対している。

一部の男性の怒りと有害な男らしさの概念への固執は、男性全員を傷つけている。

この研究が示すように、若年男性の3分の2が「誰も本当の自分を理解していない」と感じている事実は、彼らの繋がりや人間関係の脆さを露呈している。

2-3 男性の孤立がテーマ

多くの人々は完全に孤立感を抱き、達成感の欠如、不完全雇用、ネット依存といった私生活に逃げ込み、独力でやっていけるふりをしている。女性嫌悪や白人至上主義に慰めを見出す者もいる。確かに、あまりにも多くの男性が、女性の平等と人種的正義のために必要な行動を無視したり反対したりしている。

一部の男性の怒りや有害な男らしさの概念への固執は、私たち全員を傷つけている。若年男性の3分の2が「誰も本当の自分を理解していない」と感じている事実は、彼らのつながりや人間関係の脆さを露呈している。この結果は、より誠実で、より地に足が付き、より繋がりを感じ、より意味のある人生を求める呼びかけであると受け止めるべきだ。

本調査の結果が多くのの人々を不安にさせるだろうという。保守派は、この調査が男性を非難し、責め立て、米国の男らしさを貶めていると主張するかもしれない。しかしこの調査は、男性への思いやりを示し、全ての人々の利益のために健全で繋がりのある男らしさの形を構築し支援するよう、男性全員への呼びかけなのである。

2-4 7点にまとめられる男性の現在

調査から男性の現在を7点に要約している。

第1は、「不安定な男性たち」である。あまりにも多くの男性—特に若い男性—が社会から孤立し、将来に悲観的になり、ネッ

ト上の怒りに走っている。若い男性は分析の複数の領域で明確なグループを形成し、抑うつ症状、自殺念慮、孤立感の発生率が高い。「誰も本当の私を理解していない」という意見に65%が同意したことからも明らかだ。全男性の40%が抑うつ症状を示す。全男性の44%が過去2週間以内に自殺念慮を抱いた。若年男性は抑うつ症状と自殺念慮が最も高い。全男性の40%が「男性権利」「反フェミニズム」「暴力擁護」を唱える男性コミュニティの声を信頼すると回答。若年男性のほぼ半数がこうした声を信頼。18~23歳の男性は将来への楽観度が最も低く、社会的支援も最低レベルである。18~23歳の男性の65%が「誰も本当の私を理解していない」と回答している。

第2は、フェミニストの同盟者か、それとも反対者かの選択に立たされている点がある。ジェンダー平等の進展が緩やかな中でも、多くの男性は同盟者となる用意がある一方、混乱を示す者もいる。男性の約半数は女性のエンパワーメント政策に反対または疑問を抱いている。半数以上が「現代アメリカでは男性の方が女性より厳しい立場にある」と認める一方で、大半は中絶の権利を支持し、職場や友人関係で同盟者としての行動を取る者も多い。男性が女性の権利運動にどう反応し、あるいは反対するかは一様ではない。つまり、男性を同盟者として巻き込む取り組みは、男性の見解や声の多様性を考慮し、精緻に研究された、ニュースのあるものでなければならないことを示唆している。

53%の男性が「今日の米国では、男性は女性よりも厳しい状況にある」と同意している。全男性の約3分の1が、性的関係後に

虐待の疑いをかけられることを懸念している。47%の男性が「フェミニズムは米国をより良い場所にした」という主張に反対している。男性の約3分の2(65%)が、中絶はほとんどの場合または全ての場合で合法であるべきだと考えており、この意見は若い男性で最も高い割合を示している。16%の男性が、女性を傷つける冗談を言う友人を注意したことがあると回答している。

第3は、現実よりも充実したオンライン生活についてである。オンライン生活はつながりを提供するが、しばしばオフライン生活を置き換える。多くの男性はオンライン生活をオフライン生活よりも有意義だと認識しており、ほぼ半数が仮想的なつながりが「人生の他の部分よりも魅力的でやりがいがある」と回答している。

若い男性の約3人に1人は、前週に世帯外の人と直接会う時間が全くなかった。男性のほぼ半数(48%)が、オンライン生活はオフライン生活より魅力的でやりがいがあると回答した。身近な地域で親しく頼れる人が3人以上いる男性はわずか22%である。若年男性の約30%が、過去1週間で世帯外の人と時間を過ごさなかったという。男性の6割が少なくとも週1回はポルノサイトを閲覧している。

第4は、「愛を求めて」いる。男性は真剣な恋愛関係を望んでいるが、多くは見出せていない。調査結果は、若い男性ほど独身である可能性が高く、性的パートナーが少なく、あるいはセックスレスである可能性が高いという最近の報告を裏付けている。全体として、調査対象者の大多数は、満足できる安定した関係にあるとは言えなかった。22%の男性は「ほとんど交際相手を探して

いない」か「性的パートナーを見つけられない」状態にある。13%の男性は「一時的な関係はあるが、より真剣な関係を望んでいる」と回答。38%の男性は「安定した関係にあり、概ね満足している」と回答。46%の男性がデートアプリを利用した経験があり、そのうち真剣な関係を望む割合がカジュアルな関係を求める割合を上回った。

第5は格差が深刻である。低所得で大学教育を受けていない男性は、社会的支援と楽観性が最も低いと報告している。大学教育を受けていない男性は特に不安定な立場にあり、社会的支援や楽観性を含む幸福度測定において最下位に位置している。「近代化の文化的敗者」として、彼らは怨恨と反動の政治に特に影響を受けやすい。最低学歴の男性は社会的支援・人生の目的・楽観性が最も低い。「誰も本当の私を理解していない」と答える割合も最高である。高卒以下の男性の約6人に1人が「全く社交活動がない」と回答している。学士号未満の男性は統計的に有意に高い割合で「スマホやネットに費やす時間を減らすべきだとよく考える」と回答しており、オンライン生活への依存を裏付けている。

第6は「誰も信用しない」点である。若い男性は、政治家、公人、公的機関に対して明確な忠誠心をほとんど持っていない。私たちのデータは、年齢や性別を問わず、公的機関に対する信頼度が低いことを示している。このデータは決して新しいものではない。このデータで注目すべきは、この信頼度が若い男性の間で最も低いことが多いという点である(ただし、公立学校は例外で、若い男性は年配の男性よりもわずかに信頼度が高い)。また、ジョー・バイデン大統領もド

ナルド・トランプ前大統領も、男性の過半数の信頼をほぼ得ていないことも注目に値する。これらの調査結果は、私たちがこの課題に立ち向かい、若い男性たちとの架け橋を築かなければならないことを示しています。若い男性の態度は、国の一般的な政治的二極化を反映しており、全年齢層の男性の29%がバイデン氏を信頼すると回答しているのに対し、トランプ氏を信頼すると回答した全年齢層の男性は24%に留まっている。最年少の男性の多くは、バイデン(15%)よりも、オンライン上で女性嫌悪的な発言を行うインフルエンサー、アンドルー・テイト(20%)を信頼している。連邦政府から警察、地元の学校に至るまで、公的機関や公共機関に対する信頼度は14%から31%の範囲である。

第7は「男性像の罨」である。男性中心主義コミュニティと怒りの声は、より多くの男性を「有害な男性像」へと駆り立て、多くの男性に人生の目的を提供している。現代の男性性に伴う圧力と不確実性の中で、女性蔑視的な見解や慣行は健在であり、近年ではむしろ人気を増しているケースもある。

このデータは、一部の男性に意味と目的を提供する男らしさの形態こそが、最大の社会的害悪を引き起こしていることを明確に示している。これは、より高尚で、繋がりを重視し、公平性を求め、社会を修復する男らしさの形態を育むという喫緊の課題を示唆している。同時に、変化する世界で自らの居場所を探る男性たちの現実に対して、批判と共にある思いやりを持つことの必要性も問いかけている。2023年現在、若年男性の間では2017年よりも男性像に関する制限的な見解が広く浸透している。政治的

見解、年齢、人種、教育水準は態度形成と統計的関連性を示すものの、いかなる男性集団においてもこうした制限的な考え方は根絶されていない。男性の3分の2は、男らしく振る舞うことでより称賛され受け入れられていると感じている。

2-5 男らしさ規範へのとらわれ

「マンボックス」(男性は女性パートナーを支配し、弱さを示さず、紛争解決に暴力を使うべきだという広く共有された価値観)を遵守する男性は人生の目的意識が最も高く、一方、男性性について最も進歩的な見解を持つ男性は人生の目的意識が最も低い。

最後に、こうした調査をもとに問うている。「私たちに何ができるのか」と。完全なジェンダー平等を実現するには、より繋がりが、より共感し、より公正な男性像が必要だ。そうした男性像はすでに私たちの身の回りに存在する。私たちは、女性や少女、ノンバイナリーの人々のためのジェンダー平等を支持しつつ、男性や少年たち自身のためにより良い生活と健全な男性像を促進する対話を実現でき、また実現しなければならない。

要するに、少年や男性は「大丈夫」ではない。彼らの不快感や混乱は、ジェンダーや人種的公平性への支持が弱まっていることと関連している。しかし、希望の兆しも確かに存在する。多くの男性がジェンダー平等と健全な男性像に賛同している。これを基盤に、ジェンダー平等と人種的正義のためのアライシップ、そして健全で繋がりのある男性像がもたらす明白な(そして数多い)利益について、大規模な物語の転換が必要だという。そして男性がこうした対話の中に目的と志を見出せるよう支援しなければならない

らない。

この調査から、深い確信と思いやりをもって対話に臨まねばならないという。特に「男らしさの枠組み」に強く惹かれる多くの男性が置かれた不安定な立場を考慮すべきだ。本調査は、完全なジェンダー平等と人種的正義のために男性がより良い同盟者となるべき方法について議論を推進する全国的取り組みの始まりに過ぎない。調査をもとにして、政策立案者、職場、メディア、スポーツ界、非営利組織を横断する連携を構築し、あらゆる性自認を持つ個人の利益のために健全な男性性を促進することを目指す。

本報告書と並行して、家庭内暴力・性暴力根絶に取り組む国内主要団体の一つである「Futures Without Violence」と「Center for Masculinities and Social Justice」は、健全で積極的な男性性のための全国プラットフォーム草案作成に向け、戦略的円卓会議を開催するという。この会議では、以下の5つの主要テーマにおける変革を実現する行動計画を策定する。テーマは、職場と経済的役割、ケア提供、メンタルヘルス、人間関係、そしてアライシップ(支援者としての役割)である。

3. 男性性の文化の強い国の国際比較の研究から

また別の「男性性研究による社会研究」がある。G. ホフステード(マーストリヒト大学名誉教授)、G. J. ホフステード(ヴァーヘニンゲン大学准教授)、M. ミンコフ(ブルガリア国際大学准教授)らの共同研究である。岩井八郎(京都大学教授)、岩井紀子(大阪商業大学教授)／訳の『多文化世界ー

違いを学び未来への道を探る』有斐閣、2013年)である。

ホフステードの「男性性/女性性」は、社会が「達成や競争(男性性)」を重視するか、「生活の質や協調(女性性)」を重んじるかを示す指標を用いて国際比較を試みている。日本は95点と世界で最も男性性が高い国で、競争・仕事・地位を重視している。一方、北欧などは女性性が強く、ワークライフバランスや思いやりを重視する。これは文化次元モデルの一つである「男性性(Masculinity)と女性性(Femininity)」に焦点を当てている。

「男性性と女性性の定義」として生物学的な性別(Sex)ではなく、社会的な役割(Gender)の分化の度合いを意味するとする。男性的な社会(Masculine societies)では情緒的なジェンダー・役割が明確に分かれている。男性は「強さ、自己主張、物質的成功」が期待され、女性は「謙虚さ、優しさ、生活の質(クオリティ・オブ・ライフ)」に焦点を当てることが期待される社会だと操作的に定義をする。

女性的な社会(Feminine societies)は男女のジェンダー・役割が重なり合っている。男女ともに「謙虚、優しく、生活の質を重視する」ことが期待される社会だとされる。

日本は調査された国の中で最も男性性スコア(MAS)が高い国の一つ(約95点)とされ、イタリア、メキシコ、アメリカなども高い傾向にある。対照的に、スウェーデン、ノルウェー、オランダなどの北欧諸国は極めて女性的な社会に分類されている。男性性と女性性に紐づけて社会の特性を語ることがジェンダー研究からは批判され、その後、名称変更がなされた(2023年末から

2024年初頭にかけて、Hofstede Insightsはこの指標の名称を「Motivation towards Achievement and Success（達成と成功への動機付け）」へと変更した。これはジェンダーをバイナリー（二分法的）に扱うことへの顧客の不快感を考慮したという。二分法的思考にならないようにという配慮だが、最近まではこの男性性－女性性の軸が達成と成功への動機に関わるものとして指標化されていたこともありそのまま紹介しておく。

ホフステードの達成志向と成功志向（旧称：男性性対女性性）は、競争・積極性・物質的報酬を重視する傾向（高MAS）と、協調・謙虚さ・生活の質を重視する傾向（低MAS）を測るものだ。高得点文化（例：日本、ドイツ）はキャリアの成功と野心を重視し、低得点文化（例：スウェーデン、ノルウェー）はワークライフバランスと調和を優先する。日本は、男性的志向社会であり（例：日本、米国、ドイツ）、競争、達成、自己主張、物質的成功に駆り立てられる傾向がある。職場文化としては「働くために生きる」という姿勢で、野心・権力・業績が重視されている。性別役割はより明確で、男性には積極性と競争心が求められると男性中心社会であることが指摘されている。他方、女性的社会（例：スカンジナビア諸国、オランダ）では、協調性、謙虚さ、弱者への配慮、生活の質を重視されている。労働文化としては「生きるために働く」というワークライフバランス志向が強く、人間関係・合意形成を優先されるという。性別役割は流動的で重なり合い、男女ともに謙虚さと思いやりを重視する。それを一覧にしたに種類の図を掲載しておく。一つはホフステ

ードらの男性性と女性性の定義に用いた指標である。二つは権力性と交差させて男性中心社会であることの度合いを国際比較したものである。男性らしさの強い社会という指標で日本は得点が高い。

一般の意識だけではなく学問の言葉でも男性性や女性性とされる意識や行動があり、それを仮置きしてそれに基づいて社会を比較する試みなので一定の傾向は読み取れる。

4. 男性・男性性の生態のなかからの男性相談－「木を見て森も見る」

一般社団法人 UNLEARN は脱暴力を試みる拠点であるが、その過程はそう簡単ではない。これまで暴力的であった生き方の特性が、脱暴力過程にも反映されるからだ。暴力を振るう加害男性と対話していると、たとえば、解決を急ぐこと、問題解決について自分で決めてしまうこと、もう自分は大丈夫と思い込み相談に来なくなること、相手も悪いと述べることなどが散見される。この行動特性は日常的であるのだろう。したがって、暴力の出来事それ自体というよりも、暴力を含んで成立している彼の日常生活という生態学的な環境や行動のシステム、日常生活の営みかた、つまり関係性の組成の仕方自体を対象にして脱暴力を検討していくことになる。

一人ひとり、暴力や虐待をした男性との対話（加害者臨床的）を続けていると、彼の生きられた小さな環境が浮かび上がる。出来事としての身体的暴力は氷山の一角なのでその下に沈んでいる膨大な量の塊を溶かしていくことになる。暴力を肯定する文脈を探ることになる。「図」としての暴力事件

だけではなく「地」としての暴力や抑圧を無自覚に包含する彼のミクロ環境へと降り立っていく。これを暴力の文化として把握する作業をしている。そうすると暴力を育む森がみえてくる。男性性の強い社会と重なる。暴力を振るう男性が生きる森のようである。その森と地続きになった環境に男性である私も生きている。男性相談に携わる者の心得として森と木の双方を視野に入れることが必要だと思う。

今回は考察できないが、引き続きこうした男性の現在や男性中心社会が強い日本社会において紹介・検討していきたいことがある。

たとえば、男性たちのコミュニケーションで「私メッセージ」が難しいと感じることが多い。これも同じように男性性のコミュニケーションの渦があり、「私」が表出し

にくいことがある。「私」を言語化することが主眼の男性相談の現場では極めて重要な点である。

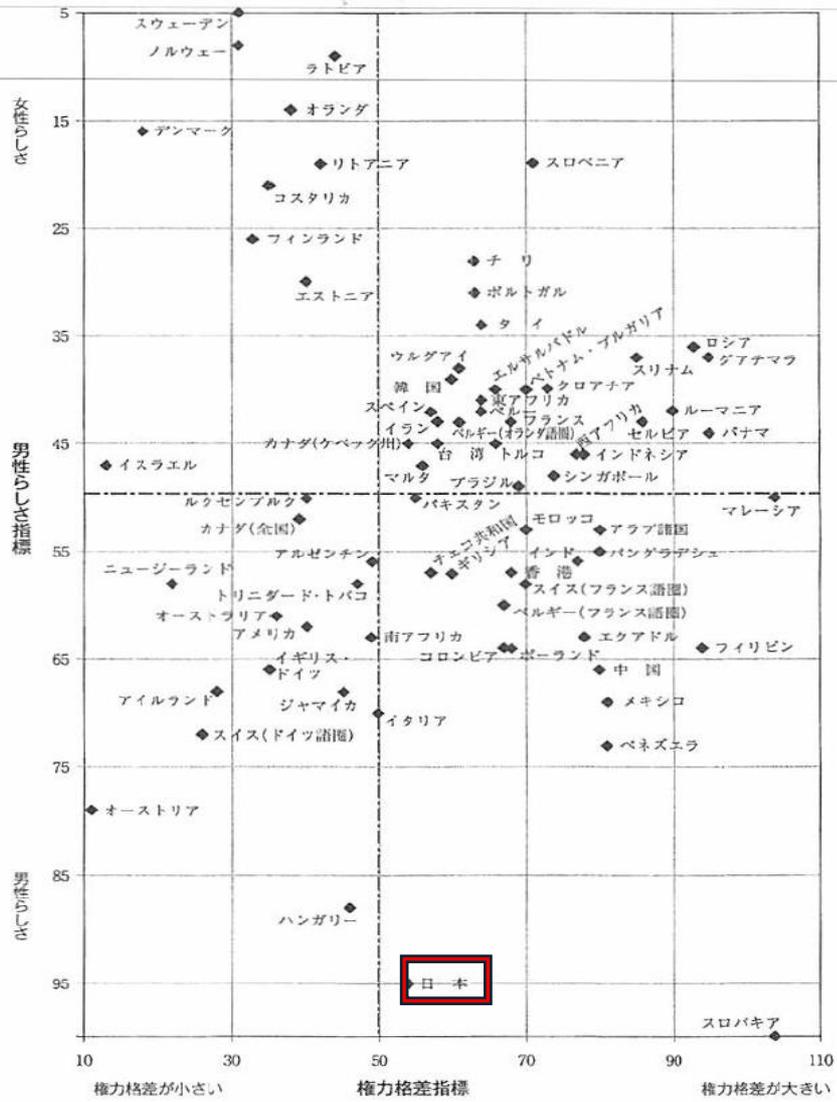
また、男性性が PTSD のように存在し、外傷をもたらすように抑圧的に作用することがある。たんに心の傷という被害者ポジションに立つ言い方ではない外傷の把握が必要なことを痛感している。たとえば、イギリス心理学会の指針（診断マニュアルではなく）があり、社会構造的なジェンダー作用を把握する新しいアプローチであるメアリー・ボイルほか著『精神科診断に代わるアプローチ PTMF—心理的苦悩をとらえるパワー・脅威・意味のフレームワーク』（北大路書房、2023年）である。これらも今回の論点をもとに考えていきたい。男性との対話の実践から考え直す必要のある事項は多い。

表5・3 女性らしさの強い社会と男性らしさの強い社会の基本的な違い

② ジェンダー、性	
女性らしさの強い社会	男性らしさの強い社会
<ul style="list-style-type: none"> ・女性も男性も責任感、決断力、野心、思いやり、やさしさを、等しく持つべきである。 ・女の子は男の子を応援しない。 ・女性の解放は、男女が家庭でも仕事でも平等に分担することを意味する。 ・基準はひとつであり、男女とも主体的である。 ・裸を見せることへの規範は男女とも同じである。 ・性に関する議論が露骨で、暗黙の象徴的表現が少ない。 ・セックスは二人の人間が関係を結ぶ方法である。 ・セクハラはあまり問題にならない。 ・同性愛は普通のことである。 	<ul style="list-style-type: none"> ・男性は責任感、決断力、野心を持つべきであり、女性は思いやりとやさしさを持つべきである。 ・女性の野心は男性の成功を通じて達成される。 ・女性の解放は、これまで男性の占めてきた地位が女性にも認められることを意味する。 ・ダブル・スタンダードがあり、男性は主体的、女性は従属的である。 ・女性よりも男性のほうが裸を見せることのタブーが強い。 ・性に関する露骨な議論はタブーであり、官能を象徴する表現は暗示的なものである。 ・男性の性的達成は女性にとっては搾取を意味することもある。 ・セクハラは重大な問題である。 ・同性愛は社会への脅威と考えられている。

『多文化世界—違いを学び未来への道を探る』（有斐閣、2013年）144ページより

図 5・4 権力格差指標と男性らしさ指標



『多文化世界-違いを学び未来への道を探る』(有斐閣、2013年) 138 ページより



文末に紹介した PTSD とは異なるアプローチの PTMF の翻訳書と原著（ダウンロード可）



アメリカの「男性の現在」を調査した報告書（ダウンロード可）

2026年2月28日受理

なかむら ただし

立命館大学 社会病理学・臨床社会学・男性性研究